

口語資料としての明治期落語速記

野村雅昭

キーワード 落語 速記 話しことば 東京語 『百花園』

1 東京語研究と落語速記

近代語研究の一分野としての東京語の研究は、この半世紀に格段の進歩をとげた。そこでは、会話書、辞書、小説、新聞、雑誌などの資料がもちいられた。落語・演説などの速記資料も、当然それにくわえられてよいはずである。しかし、なぜかそれらの速記資料はこれまであまり活用されていない。それは、以下にのべるように、口語資料としての信頼性に問題があるからでもあるが、落語という演芸に対する偏見にちかいものがあるためでもある。その偏見とは、落語は下町の長屋の住人たちのこっけいな言動をえがくものであり、話者である落語家のことばもそれにちかいもので、下町ことばの一面しか観察しえないだろうというものではないかと臆測される。

もちろん、数はすくないといっても、三遊亭円朝の速記については、かなりの研究が発表されている。しかし、それは言文一致体の成立に影響をあたえた偉大な芸能人という特別視した評価にもとづくものであると推測される。たしかに、円朝はその話術や創作活動において傑出した存在であった。けれども、江戸語・東京語の話者としてみるならば、同時代の他の落語家と甲乙はつけがたい。ほかの落語家について資料がのこされていないならば、話は別だが、円朝の速記とならんで、同時代には多数の落語速記本が出版されている。そして、ここでとりあげようとする落語速記雑誌には、さらに多くの落語家の口演速記が掲載されているのである。本稿の目的は、そのような落語速記雑誌の語彙調査データにもとづき、その言語資料としての適格性を検証しようとするものである。

日本における速記法は、田鎖綱紀により創始され、1882（明治15）年に発表された。田鎖の門人の若林珪蔵と酒井昇造は、速記の実用性の普及と宣伝をはかるために、当時人気のあった円朝の人情噺を速記によりうつしとり、それを出版することをかんがえた。それは、1882（明治15）年に、三遊亭円朝演述・若林珪蔵筆記『怪談牡丹燈籠』として、東京稗史出版社から刊行された。これが世人のむかえるところとなり、つぎつぎに円朝の口演速記が刊行された。また、新聞にも連載され、1889（明治22）年には、講談・落語の速記を中心とする雑誌『百花園』が金蘭社から発刊されて、昭和初期までの落語速記本全盛期の基礎をきずいた。

『怪談牡丹燈籠』の成立については、若林や酒井の序詞や回顧談がある。言文一致と落語速記のかかわりについては、坪内逍遙の有名な序文や二葉亭四迷の回顧談がある。本来ならば、それらを引用しながらのべるべきだが、紙幅の制約から省略にしたがう。

2 円朝口演速記の評価

言語資料としての落語速記の評価をはじめておこなったのは、山本正秀(1962)である。山本は、『怪談牡丹燈籠』の成立事情に種々の問題があることを考慮しながらも、それが円朝の口演を文章にしたものとみてよいとする。山本(1965)では、円朝と若林らのほかの第三者の手がくわったことにふれつつ以下のようにのべている。

しかし口演のままを建て前にしそれを尊重したからには、円朝の話そのものや用語にまでは手をくわえさせたのではあるまいと思われるから、『牡丹燈籠』の文章は、やはり相当によく円朝の語りぐせと言葉を伝えているものと思われるのである。(371ページ)

その後、円朝速記の『怪談牡丹燈籠』や『真景累ヶ淵』などを資料として、円朝の言語そのものを研究対象とする論文が発表されるようになった。佐伯哲夫(1981)、進藤咲子(1985)、佐藤亨(1992)などである。それらは、円朝速記の信頼性を問題にしながらも、一定の範囲での利用はさしつかえないとする点で共通している。

これに対して、円朝速記を口語資料とみることそのものに否定的なのが清水康行である。清水には、稿末の文献にかかげたほかにも、明治期の落語資料に関するほうだいな論文がある。そのなかで、落語速記の口語資料としての評価について、とりわけ注目されるのは、清水(1983)と同(1998)である。前者では、『怪談牡丹燈籠』の条件法・音便形などの調査にもとづく、文体上の不統一を指摘し、それが成立の経緯にまつわる執筆者と校閲者の不分明な関係に由来し、初版全13編の構成上の不備につらなることを主張する。後者では、若林珮蔵の著述による『速記法要訣』(速記法研究会、1886)を調査し、速記記号に、ゆれのある語形を1種の符号に統一する表語性のあることを指摘し、若林が『怪談牡丹燈籠』の「序詞」で標榜する、速記が「言語を直写」したものであることに、根本的な疑問を呈している。

清水の研究のもうひとつの特徴は、20世紀初頭から普及しはじめた平円盤レコード(SPレコード)を活用していることである。清水(1986a, 1986b)などでは、それとの比較のうえで、速記資料が信頼できないことにしばしば言及する。なお、速記本とSPレコードを使用して近代大阪語の研究をしている金沢裕之(1998)は、速記本について「一定の評価は与えてよい」(23ページ)とのべている。

清水(1988)には、『怪談牡丹燈籠』を資料とした、用字についての研究もある。田島優(1998)にも、『牡丹燈籠』の「振り仮名と漢字表記の関係」についての考察があり、「漢字表記に付されている振り仮名を辿って読んでいっても、必ずしも演者の語ったとおりのことばでないことにな

る」(34ページ)、「振り仮名の語に対して用いた漢字表記も、漢字表記をもとに付された振り仮名も、ともにその当時のことばの許容範囲内であったのである」(63ページ)などの記述がある。

これらの落語速記とりわけ円朝速記に対する評価には、耳をかさなければならないことがおおい。しかし、本稿でとりあげようとする雑誌の落語速記に関しては、清水をのぞけば、ほとんど研究の対象とされてこなかった。円朝速記に対していわれることが、そのまま雑誌速記に対してもあてはまるかどうかは、実はまだわからない。円朝速記が読み物としての完成度をもとめるため、さまざまな粉飾をほどこされた可能性があるのに対し、毎月2回発行される雑誌速記は、時間におわれることもあるせいも、きわめて蕪雑な一面がある。誤植のおおきなどは、目をおおうものがあるが、それがかえって、潤色のすくなさをものがたっている可能性もある。

円朝の作は、ほとんどが江戸を舞台とした、一種の時代小説である。明治期に舞台が設定されるのは、翻案物の『英国孝子之伝』(1885)と『黄薔薇』(1887)の2作にすぎない。それに対して、雑誌速記には明治20年代の世相がえがかれる。そこにうつしだされることばが、はるかにいきいきしたものであることを期待してよい。

録音資料との比較では、当然みおとりするだろうが、なによりも量にめぐまれている。19世紀末の東京語資料として、はたして雑誌の落語速記が利用にたえうるかどうかは、大量の調査にもとづく分析と検証の結果にまたなければならない。

なお、前述の諸研究については、単に概略を紹介したのみで、きちんとした引用も検討もおこなっていない。それについては、以下の調査がある程度まとまったところで、あらためておこなうことにする。

3 『百花園』調査の概要

3.1 調査の目的

以上にのべたような経緯から、筆者は『百花園』に掲載された速記を対象に、その語彙調査をおこないながら、データベース化する作業をすすめている。それにより、どのような語がどのような頻度でつかわれているかがあきらかになり、その位置づけが可能になる。また、それぞれの表記の実態を把握することにより、ルビと語形との関係をたしかめることもできる。これらは、すでに一部の研究ではこころみられているが、体系的かつ総合的なものとはなっていない。語彙調査を基盤とすることは、その意味でも有効であるはずである。

もっとも、本稿で報告するところは、その一端にすぎない。このような調査が意味をもつものか、そうでないかということについて、おおかたの批判をうけるために、まずは小報告をこころみるものである。

3.2 速記雑誌『百花園』について

演芸速記雑誌『百花園』は、1889年に金蘭社から発刊された。その輪郭は、朝倉治彦(1961)、

榎本滋民 (1962) および筆者の調査によれば、以下のとおりである。

- ・ 1889年 5月創刊。終刊は不明。ただし、国会図書館には第240号(1900.11)まで収録。その後まもなく終刊とみられる。
- ・ 毎月 5日と20日に発行。第21巻から、月 1回発行に変更。
- ・ はじめの20号までを第 1巻とし、以下、おおよそ10号を 1巻とし、号数は継続する。
- ・ 菊判23字詰16行 2段組。各冊78ページ。第21巻からページ数を倍にふやす。
- ・ 各冊に 7、8編程度の講談・落語速記をのせる。講談および人情噺は長期の続き物として掲載。滑稽噺(狭義の落語)は 1回で読切。ただし、数回にわたるものもある。
- ・ 登場する落語家は50名以上。三遊亭円朝は小咄をのせるのみで採録されず。
- ・ ほぼ絵ルビ。数詞はルビをはぶくことがおおい。頻出語も省略されることがある。
- ・ はじめは句読点はないが、第 3巻ごろから読点のみを使用。

『百花園』は好評をもって世間にむかえられ、1号から10号ごろまでは毎号 1万 5千部もうれたという。この成功にならい、その後類似の速記雑誌が続出した。東京では『花筐』(1889)、『都の錦』(1896)、『華の江戸』(1896)、大阪では『百千鳥』(1899)などがいられている。『百花園』が終刊にちかづくころから、雑誌『文芸倶楽部』(1895創刊)に落語速記がのようになり、1899年ごろから年 2回落語・講談を中心とした臨時増刊号が発行され、大正末期までつづく。

この『百花園』と『文芸倶楽部』から、主として落語速記をぬきだし復刻した全集に、下記の 2点がある。

普通社版『落語名作全集〈第二期〉(全 5巻)』榎本滋民編 1961-62

講談社版『口演速記 明治大正落語速記集成(全 7巻)』暉峻康隆・興津要・榎本滋民編 1980-81

特に、講談社版は良心的な復刻である。講談社版の刊行以後、『百花園』速記を資料とした論文が数点発表されているが、いずれもこの講談社版をつかっている。信頼度はたかいけれども、ルビをふくむ表記のあつかいには、一般の出版物としての制約があり、研究資料としては原本にあたるべきである。以下の調査では、早稲田大学中央図書館、同演劇博物館、国立国語研究所図書館の蔵本を使用した。

3. 3 調査演目

この『百花園』速記のうちから、今回の報告では、三遊亭円遊口演の11席を対象にした調査結果を報告する。演目およびそれぞれの語数を次ページの表 1にかかげる。なお、以下のものは調査対象からのぞいた。したがって、語数にはふくまれない。

標題 演者名 速記者名 会話の「の前の発話者名 ()内の注記

表で演題としたものは、雑誌の演題とことになっている。『百花園』の演題には文学的な効果をねらった臨時の命名があり、のちに、ほかの資料と比較する際の便宜を考慮し、表記をふくめ、以下のように現行の演題にあらためた。変更のないものは、かかげない。なお、「成田小僧」は、あ

表1 調査対象速記および語数

演題	巻号	刊年・月	速記者	語数(延べ)		
				地	詞	計
成田小僧・上	1-1	1889.5	酒井昇造	83	1,628	1,711
干物箱	1-2	1889.5	酒井昇造	121	1,501	1,622
つるつる	1-5	1889.7	酒井昇造	86	1,251	1,337
船徳	1-10,11	1889.9,10	酒井昇造	395	2,512	2,907
王子の幫間	1-12,13,14,15	1889.10,11,12	酒井昇造	377	3,519	3,896
成田小僧・下	3-37,38	1890.11	酒井昇造	440	2,263	2,703
素人洋食	3-40,4-41	1890.12,1891.1	今村次郎	548	1,495	2,043
ずっこけ	4-42	1891.1	今村次郎	320	1,334	1,654
穴どろ	4-47	1891.4	酒井昇造	580	1,240	1,820
道具屋	5-57,58	1891.4	増田鉄太郎	264	1,794	2,058
夢の酒	6-61,62	1891.11	増田鉄太郎	331	2,228	2,559

いだをにおいて掲載され、噺も連続性がとほしいので、別の演題としてあつかった。

- 成田小僧・上 ← 成田小僧
- 干物箱 ← 乾物箱
- つるつる ← 思案の外幫間の当込み
- 成田小僧・下 ← 成田小僧(下ノ巻)
- ずっこけ ← ズッコケ
- 穴どろ ← 穴蔵の泥棒
- 道具屋 ← 道具の開業
- 夢の酒 ← 夢の後家

三遊亭円遊の所演のみを対象にしたのには、理由がある。「百花園」に収録された落語家のうち、円遊の所演がもっともおおい。しかも、初期の明治20年代前半のものが多数をしめる。速記者による表記のちがいをみるためには、格好の数である。また、単行本速記、SPレコードもたくさんあり、比較しやすい。改作・新作がおおく、同時代資料としてあつかいやすい。改作のなかには、現行の東京落語の原型となっているものがおおくあり、のちの演者の口演と比較ができる。

三遊亭円遊について、付言をする。小石川小日向水道町の紺屋のむすこととして、1850(嘉永3)年に生まれ、1907(明治40)年に没した。三遊亭円朝の門人となり、円遊をなれる。円遊は正確には三代目らしいが、有名になったため、初代とするのが普通である。人情噺にくらべて軽視されていた滑稽噺を独立したジャンルとして確立した功績はおおきい。

3.4 調査単位

この調査では、文節を基準とした、いわゆる「長い単位」をもちいることとし、直接には国立国語研究所(1995)のテレビ放送の語彙調査の単位によることにした。同調査の単位規則は「第

5章 単位語の認定（調査単位）」(49-63ページ) にしめされている。

この単位規則による理由は、このテレビ放送の語彙調査が話しことばを対象にして設定されたものであることである。これまでの「長い単位」とくらべて、基本的におおきな異同があるわけではないが、1文節とみとめるものには、以下のような特徴がある。

猫である 寒くない 泣いている 食べてみる 読んでください 行かなければならない

これまでの単位規則では、たとえば「泣いている」は「泣いて||いる」のように2単位とし、「泣いてる」もそれにあわせ、「泣いて||いる」の形に復元して処理してきた。しかし、話しことばの調査では、「泣いている」と「泣いてる」はそれぞれ1単位として処理するのが妥当である。

ただし、この方法では、「猫だ」「猫である」「猫です」「猫でございます」はそれぞれ1単位となり、「だ」「である」「です」「ございます」などは調査単位としてかぞえられなくなってしまう。そのため、本調査では、各単位に付加情報をつけデータベース化することで、任意の検索が可能にしてある。また、代表形（見出し語）をどのように認定するかについては、かならずしもテレビ放送語彙調査にしたがわないところがある。

3. 5 語彙量

本稿で報告する全数調査の語彙量は、表2のとおりである。表2には、演目ごとに、語種などの別にそれをしめた。総語数は、24,310である。

ただし、ここには延べ語数のみをかかげ、異なり語数はしめていない。これは、まだ集計がおわっていないためである。異なり語数については、別稿の野村雅昭(2001)において、若干の演目をくわえた集計結果をしめす予定である。したがって、ここにしめた数字にも多少の異同が生じるかもしれない。また、品詞別の集計も、ここにはしめすことができなかった。それらについては別稿で報告することにする。

表2 出現語彙の語種別分類（延べ）

	一般語				非一般語（固有名詞）			計
	和語	漢語	洋語	混種語	地名	人名	その他	
成田小僧・上	1,249	283	6	138	11	20	4	1,711
干物箱	1,269	224	11	77	11	27	3	1,622
つるつる	1,015	216	4	48	12	25	17	1,337
船徳	2,036	365	5	142	32	42	15	2,907
王子の幫間	2,868	608	25	166	86	64	79	3,896
成田小僧・下	2,018	343	2	152	61	91	36	2,703
素人洋食	1,533	335	38	95	9	25	8	2,043
ずっこけ	1,295	249	5	84	11	8	2	1,654
穴どろ	1,417	240	7	100	18	34	4	1,820
道具屋	1,702	253	2	85	3	11	2	2,058
夢の酒	1,998	384	13	108	44	8	4	2,559

4 口語資料としての落語速記の検討

以下では、上記の調査にもとづき、若干のトピックについて、『百花園』の速記に当時の東京語がどのように反映しているかを考察することにする。体系的な記述は、後日にゆずる。ここでは、雑誌の落語速記が研究の対象となりうるかどうかを検証するのが目的である。

なお、原文の引用にあたっては、字体はさしつかえのないかぎり、通行のものをもちいる。変体ガナは、現行のヒラガナであらわす。2字分のおどり字は、「〜」でしめす。ルビは省略するが、必要なあいは〔 〕でしめす。引例の末尾の（ ）内に、(道具屋、与太郎、今村)のようにしめすのは、演題・発話者・速記者の別である。発話者は、登場人物または地の部分の演者(この報告では三遊亭円遊)のことである。

[ツマラヌ／ツマラン／ツマラナイ／ツマラネー]

現代では、おもしろくないという意味の連語ツマラナイは、一語の形容詞のようにつかわれるが、明治期ではナイの部分ガネー・ン・ヌとも交替する。つまり、4種の語形をもつことになる。調査にあらわれたこの語の総数は21で、それを詞(会話)と地の部分にわけると、以下のような分布をしめす。

	ツマラヌ	ツマラン	ツマラナイ	ツマラネー
詞	—	10	2	4
地	2	2	1	—

いちばんよくつかわれるのはツマランで、この語がまだ連語的であることをしめしている。この時期には、助動詞のヌ(ン)からナイ(ネー)への移行はかなりすすんでいるから、この分布は保守的な傾向をしめすとみることもできる。ツマランをつかう人物は、商家の主人などがおおい。4の例の船客は、おなじ階層である友人に対しての発話なので、ややくだけたものいいとなっているが、ふたりとも「通家」とされている。職人などはツマラナイまたはツマラネーにかたむいている。会話のなかの人物はツマラヌをつかっているはいない。

1. 此の結構な東京を捨て、田舎へ往 [い] くのは詰らないからと相談したのが初まりで (ずっこけ、職人、今村)
2. 酒家 [さけのみ] の癖に腹ふさげに詰らねへものを喰たが (穴どろ、職人、酒井)
3. 詰らねエ言 [こと] を云やアがるナ (船徳、船頭、酒井)
4. オ、兄弟詰らん言を云ひねエな (船徳、船客、酒井)

地の語り手である三遊亭円遊は、ツマラネーをつかっていない。5にはツマラヌ・ツマランのほか、「居りますと」のようにマスルという丁寧な形もみられる。落語家のふだんのことばづかいとはともかくとして、高座のそれは決して登場人物とおなじではないことを、このデータはものがたっている。

5. 平日詰らんことを考へて居りますと夢に迄詰らぬことの夢を見ます(夢の酒、円遊、増田)
6. (略)と詰らん事を考へながら上野公園の鞆鞆[ぶらんこ]で揺動[ゆすぶら]れて見たりしても(穴どろ、円遊、酒井)
7. 一文足りねへ奴が(中略) 詰らない事を願ひます(穴どろ、円遊、酒井)

つまり、演者としての円遊は、自分のことばと登場人物のことばをつかいはけている。速記者もそれを忠実にうつしている。このような点からみれば、落語速記を当時の口語をうかがう資料としてみることも、あながち無理ではないといえそうである。

[テシマウ/チマウ]

現代東京語の話しことばでは、「会社ニオクレチャッタ」のように、完了のAspectとしてはチャウ(チャッタ)をつかうのが普通である。ただし、あらたまつた会話や書きことばでは、テシマウもめずらしくはない。チマウも耳にしないではないが、位相的な語感がともなう。田中章夫(1985)によれば、これらの表現は江戸時代からつぎのような順序で発達してきたとされる。

…(動詞連用形) シマウ → …テシマウ → …チマウ → …チャウ

チマウからチャウへの変化は、明治後期におこつた。ただし、下町ではその後もチマウをつかう傾向がつよく、チャウは新興の山の手階層の表現としてひろまっていたという。

調査データでは、チャウは出現せず、つぎのような分布になっている。

	テシマウ	チマウ
詞	11	68
地	—	5

チマウが優勢であることがわかる。上述のツマラナイとちがひ、旧語形のテシマウと新語形のチマウとのあいだに、使用価値の差はみられない。円遊も、地でテシマウはつかっていない。

8. 早く謝罪[あやまつ] て仕舞[しま]へてエに謝罪[あやま]りやせんで誠に相済みやせん(船徳、船頭、酒井)
9. コレサ無闇に乗ツちまつては往けない(成田小僧・上、若旦那、酒井)
10. 方々逍遙[ぶらぶら]して下谷黒門町へ来ると日が暮れちまいました(穴どろ、円遊、酒井)

飛田良文(1992)も、「完了の助動詞『チャウ』の成立」(593-618ページ)で、このチャウについて精査をこころみ、文学作品では明治20年代なかばからみえはじめ、明治30年代から多数の作品にみられることをあきらかにしている。明治20年代前半の円遊や登場人物の会話にチャウがみられないのは当然であろう。

なお、清水康行(1984)は、円遊の「太鼓の当込」(1905)・「地獄旅行」(1906)・「野晒」(1906)の3点のレコードを聴取し、テシマウ・チマウ・チャウの出現状況を調査している。それによれ

ば、テシマウはきかれず、チマウは2点で確認される。チャウは「野晒」にのみきかれるとあるが、筆者がきいてみたところ、音声不良のためか、確認できなかった。円遊がこの録音でチャウと発音していたとしても、速記の年代とは約10年のへだたりがある。その10年がまさにチャウのひろまりはじめた時期であり、速記資料にチャウがみえないことに疑問をいだかせるものではない。

[ヒ→シ]

ヒバチ(火鉢)をシバチのようになまる現象は、東京語とくに下町ことばの特徴としてよく知られている。しかし、今回の調査では、そのような例はひろうことができなかった(51ページ注参照)。下の11や12のように、職人階層の登場人物の発音でも、ほとんどヒとなっている。

11. 今俺が這入 [へゑつ] てツて引摺 [ひきずり] 揚げるから然う思へ(穴どろ、鳶の者、酒井)

12. アンな言 [こと] を云て人 [ひと] を担ぎやアがるんだ(船徳、船頭、酒井)

このような結果は、落語速記が実際の発音をあらわすものでないとする主張に根拠をあたえるものといえることができる。現在でも、落語で演じられる長屋物の住人はヒをシとなまるのが普通だし、明治生まれの落語家たちの地のことばでもしばしばきかれた。秋永一枝(1995)所収の「『東京ことば』聞書」にも、下町生まれの人々のシオシ(潮干)、シッカケテ(引っ掛けて)などの例がある。速記にヒ→シの音訛があらわれないのは、速記者たちがききとれなかったのではなく、活字にするときに、音訛をなおしてしまった結果ともみられる。

このような自省意識は、話者である円遊にもあったかもしれない。小石川(現文京区)生まれの円遊には、あらたまったところではヒをつかう意識がなかったとはいえない。たとえば、上記の「聞書」で、浅草生まれの歌人土岐善麿(1885-1980)は、つぎのようにかたっている。

大体あたしの言葉はね、東京方言というより、さっき言ったような具合に幾らか直しているかもしれないんですけどね。東京方言でもっていうヒとシの混雑は大体ヒにしていますよ。(98ページ)

清水康行(1986a)は、1903(明治36)年から1911(明治44)年までに録音・発売された平円盤レコード(70点/3時間半分)を聴取して、9名の江戸時代にうまれた落語家の音声をしらべている。そのなかには、円遊もふくまれる。そこで、明確にヒまたはシと判定された数は、以下のとおりである。()内にしめたのは、そのうち円遊の発話数である。

ヒ 32 (15)

シ 4 (2)

清水は、この結果を「予想外」としている。そして、落語家のことばが江戸ことば・下町ことばの系列にあるぞんざいなものであるという通念に対して、「必ずしもそうとは言いきれない面をもつ」としたあと、つぎのように結論づけている。

少なくとも、ヒーシの音訛は、この当時の江戸・東京出身者において、かなり抑制されうるものであったことは認められる。(438ページ)

速記において、ヒーシの現象がほとんどみとめられなかったことの解釈は、このようなことを背景になされなければならない。清水の調査では、2例ではあるが、円遊もシと発音している。したがって、速記のもとになった口演で円遊がまったくシと発音しなかったとはかんがえにくい。おそらくは、なんらかの統一意識にもとづく操作があったであろう。しかし、速記者がそうするのにためらわなかった程度に、この現象はめだつものではなかったことが推測される。音声をうつすうえでの速記の忠実さは、その程度の精確さとみることができるだろう。ナイ→ネーなどがかなり精確にうつされていることをみれば、この一事をもって、雑誌速記を信頼するにたりないとするのは速断にすぎるだろう。

[レバ/リヤー]

動詞・形容詞のエ列音にバがつづくばあいに、おなじ行の拗長音となることは、江戸時代からみられる現象である。「行けば」が「行きゃあ」となるようなばあいがそれにあたる。この現象も、上のヒーシと同様に、速記では予想外にすくない。

このような例のうち、バの前にレがくるばあいだけをひろいだしてみる。スレバがスリヤー、ナケレバがナケリヤーとなるようなばあいである。結果は、以下のようになっている。

	レバ	リヤー
詞	107	8
地	17	—

大部分は、つぎの13、14のような例である。

13. あなたが私にお話しなさらん処を見れば他に屹度 [きつと] 情婦 [をんな] を持つて御出でなさるに違ひありません (夢の酒、商家の妻、増田)
14. 私も疾 [とほ] に御機嫌伺ひに出なければならぬんですが (成田小僧・下、通人、酒井)
リヤーとなるのは、かならずしも下層の人物とはかぎらない。15は金満家とされる人物であり、16は商家の若旦那の小僧に対するものいいである。17は、ナケレバ→ナケリヤー→ナキヤーとなったもので、これ1例のみであった。

15. 何でも天ぶら見たやうな物を拵 [こし] らえりやア宜 [い] んだ (素人洋食、商家の主人、今村)

16. 喰ひたけりやア喰ひナヨ (成田小僧・上、若旦那、酒井)

17. 銭を取らなきやあ、窃盗 [どろぼう] でも何でもねへぞ (穴どろ、職人、酒井)

円遊の地の発話には、1例もみられない。19のマスレバのように、古風なあるいは丁寧ないいかたがマクラの部分の特徴である。ほかの円遊らしい使用例には、「演りますれば」(道具屋・地)、「漕ぎませんければ」(船徳・詞) などがある。

18. 洋食店を開業するにはどうも鬻を切らなければならないが(素人洋食、円遊、今村)
 19. 旦那のお気に入りの事を云ひますれば大變に大儲けが有るんでゲス(王子の幫間、円遊、酒井)

このような下町ことばに顕著な融合現象は、速記者にとって、難物であったとみられるふしがある。実際に落語の速記をしたことのある速記者の経験談には、秋山節義(1962)、福岡隆(1980)などがあるが、ここでは秋山の談を引用する。秋山は、昭和初年に速記の世界にはいった人である。秋山は、速記の創始期には、口演をそのまま文字にすることはむずかしかっただろうと推測し、つぎのようにのべる。

口が早くて、手が追いつかなければ、書き落とすことになる。また速記する上で鬼門の聴こえないこともある。書き落とした部分は「書けなかった」では話にならないから、速記者の知識で埋める。また速記文字は「なければならぬ」と書くのに適していて、「なきゃアなんねえ」とは書きにくいから落語で熊さんが「いっぺえ、やっくととかアねえか」といっても、「一杯、やっていく所はないか」と書くことになりやすい。(288ページ)

このような話をきくと、さきに問題にした清水康行(1998)の懸念が裏づけられるようにもおられる。また、速記者それぞれの技術の差ということも、検討の対象になりそうである。この融合現象を、速記者ごとに集計してみると、以下のようなになる。

	酒井	増田	今村
レバ	89	21	14
リヤー	7	—	1

このなかでは、先輩格の酒井にリヤーが集中している。増田や今村にリヤーがすくないのが上の臆測によるものか、偶然の結果にすぎないものかは、さらに調査の量をふやして検討すべきものであろう。

[可能動詞]

「…スルコトガデキル」という可能の意味を、四段動詞でたとえば「書かれる」と表現したのが、「書ける」という専用の形式でいうようになったのは、江戸末期とされる。しかし、江戸時代にはまだ主流をしめるにはいたらず、明治期をへて、大正期に定着するというのが通説である。この可能動詞は、速記では普通にみられる。

20. 貧乏だから上等 [いい] 洋服は買へねへが(王子の幫間、幫間、酒井)
 21. 今は飲めないから、飲まないんだらう(穴どろ、職人の女房、酒井)
 もちろん、…レルの形も残存しており、つぎような例がみられる。
 22. 和郎 [おまへ] の踊は何 [どう] も人間とは思はれませぬヨ恰 [まる] で象だネへ(干物箱、商家の主人、酒井)
 23. 顔が七ツにも八ツにも見えて然んなに俺の目に見える奴は身代が渡されぬ(ずっこけ、

商家の主人、今村)

24. お宅へ帰 [か] へられねエまでも (中略) 伯父さんでも伯母さんの処へでも往つて (船徳、船宿の主人、酒井)

いまは正確な数をしめすことはできないが、このような現象に関しては、落語速記は信用できるとみてよいだろう。

[マセンデシタ/マセナダ]

さきに、清水康行 (1998) の所説を紹介したときに、速記符号の〈表語性〉の例とされたものである。動詞にマスのついた形が過去・否定をあらわすときは、マセンデシタとなるのが現代では普通である。しかし、この形は明治初頭にはじめてみられるものであり、明治時代前半には、マセナダ、マセンダッタ、マセンカッタなど、さまざまな形式が存在した。それがマセンデシタに統一されていく過程は、松村明 (1998) の『「ませんでした」考』(272-295ページ) にくわしくのべられている。

本稿の調査では、つぎの2種が出現している。

マセンデシタ系 8

マセナダ 1

マセンデシタ系としたのは、27のマセンデゲシタ2例と、28のマセンデゴザリマシタ1例をふくむためである。そのほかは、29のマセナダ1例であった。

25. オヤマア久しくお目に係りませんでした (成田小僧・下、通人の女房、酒井)
 26. わたくしは平日 [ふだん] は爾 [そ] うも思ひませんでしたが (夢の酒、商家の妻、増田)
 27. 此間 [こねへだ] 箱館の火事を新聞で見て駆出して間に合ひませんでした (王子の幫間、幫間、酒井)
 28. 久しく御当社の雑誌へお断を出しませんでした御座りましたが (成田小僧・下、円遊、酒井)
 29. 他の店に無い内裏様のお虎子 [まる] や棺桶 [はやおけ] を売りましたがイヤ何うも往けませなんだ (道具屋、与太郎、今村)

松村は、上述の論文で、『怪談牡丹燈籠』(1884)、『塩原太助一代記』(1885)、『真景累ヶ淵』(1888) などの円朝口演速記では、マセンデシタが一般的であり、少数ではあるが、マセナダ・マセンカッタ・マセンダッタが使用されているとしている。また、これらの断が実際に成立した時期を1877 (明治10) 年ごろあるいはそれをさかのぼるところとみている。

円遊の速記例は全体の出現数がすくなく断言はできないが、おおよそ松村の記述にそったものといえよう。なお、29の『道具屋』の話者の与太郎は、現行の口演で二十歳代として演じられるが、円遊はもうすこし年配の人物として演じている。

清水 (1998) は、松村のこの記述に関して、それが若林珪蔵の『速記法要訣』にいう「世間一般通シテ最モ多ク用フル語」にあたる結果ではないかと疑問を呈する (50ページ)。また、つぎの

ようにものべている。

ただし、わざわざ断っておけば、この若林の姿勢は、また、松村が指摘する、当時、すでに「ませんでした」が主流であったという認識を補強する材料ともなる。(52ページ)

清水の主張には、耳をかたむけるべきである。しかし、円朝速記や『百花園』速記に、少数にもせよ、蓋然性のたかいマセンデシタ以外の語形が出現することの説明をしなければならない。マセンデシタ以外の語形が実際には多数出現していたとしても、そのおおくがマセンデシタに統合され、その網の目をくぐったのがマセナダなどの少数例であったとでも、いわなければならないだろう。かりに、それをみとめるとしても、さきに[レバ/リャー]のところでのべたように、実際に速記者がどのような態度で反訳にあたったのかということ、事実、に即して確認する必要があるとおもわれる。

[テイル/テエル/テル]

「歩イテイル」の母音が脱落して「歩イテル」のように発音される現象は、江戸ことばに顕著である。松村明(1998)によれば、『浮世風呂』『浮世床』では「テイルとそのまま保たれている場合はごくまれ」(164-165ページ)とされている。雑誌速記では、33のように「てエる」と表記される例をテエルとすると、分布は下のようになる。

	テイル	テエル	テ ル
詞	197	18	133
地	53	—	10

この分布がそのまま実際の発音を反映しているとはかながえられないが、テエルとわざわざ表記するばあいがあるからには、テイルがあったことはまちがいない。ただし、その音価が[teiru]か[teuru]かはわからない。

30. 実は当家[うち]の恥にもなるから黙てたが(干物箱、旦那、酒井)
31. と云てる中に表での入口ヘガラ〜〜来た音がするから(素人洋食、円遊、今村)
32. 後鉢巻を為[し]てエるのが威勢が好[い]いな(成田小僧・上、小僧、酒井)
33. 今迄心持の宜[い]い話をして聞かせたので、ニコ〜して居[ゐ]た処へ(成田小僧・下、円遊、酒井)

つぎの34のように、地がテイルで詞がテルになっている例がある。これは、速記者がききわけたか、あるいは、すくなくともなんらかの意識をもって、かきわけたことをうかがわせる。

34. 居酒屋の醤油樽腰掛で度を知らずに飲んで居[ゐ]るのは随分困る訳のもので然うなると幾ら飲んでも限[き]りがない
熊「オー番頭さん〜
番「へエ
熊「へエもエーも無エがノウ番頭さん、乃公[おれ]はお前の処で今朝から飲み続け

に酒を飲でるが何日 [いつ] も繁盛だのう (ずっこけ、円遊 / 職人、今村)

つぎの35も、テイルの直後にテルがあらわれる例である。

35. 何か茲 [ここ] らに金目なものが落ちて居ないか……オヤ落ちてた^てとよ男帯だと思たら
鉄道^{てつどう}の線路で御座いますヨ (つるつる、幫間、酒井)

この場面は、さいわいにほぼ同一の口演がレコードにある。清水康行 (1982) もこの部分を文字化しているが、36に筆者の耳できいたものをおかけする。

36. 何か落ちてりゃ…… (不明) どこかに金目なものが落ちてるか、オヤ落ちてたよ。男帯
かと思ったら電車のレー口でございますよ (太鼓の当込み、円遊、SPレコードより)

この部分は登場人物が鼻歌まじりに「落ちてたよ」とくりかえすところである。速記の「落ちて居ないか」のところは、レコードでは「…テルカ」ときこえる。清水は、これを「…テヌカ」ときいている。そのほうが文脈上自然だが、音声不明瞭で確認できない。

なお、さきに [テシマウ / チャウ] のところで引用した清水康行 (1984) の調査では、3点ともすべてテルの例ばかりで、テイルおよびテエルはあらわれていない。

[オッカサン / オカアサン]

現代東京語で、父母をさすオトウサン・オカアサンは、起源のわからないことばである。東京語としてそれが定着し、共通語として普及したのは、1904 (明治37) 年の国定教科書にそれが採用されてからとするのが通説だが、それ以前のことはよくわかっていない。江戸末期から明治前期にかけての江戸語・東京語資料には、オトウサン・オカアサンはほとんどあらわれない。ところが、この調査では下記の例がみられた。

37. 大和屋のお袋は義理ある阿母 [おつか] さんで、妾の本当の阿父 [おとつ] さん阿母 [お
かあ] さんが妾 [わたし] を根津の大滝と云ふ御家人の処へ遣はした処、瓦解のとき妾は
芸妓に成ましたが、本当の阿母 [おつか] さん阿父 [おとつ] さんは有ません (成田小僧・
下、芸妓、酒井)

円遊も酒井も江戸生まれである。第三者がルビをつけたともかんがえられないではないが、前後のオトウサン・オッカサンを無視して、ここだけをオカアサンとしたとするのは不自然である。理由はわからないが、やはり円遊がここだけはオカアサンと発音した可能性が大きい。ほかに出現例がないかどうか、あとの調査をまつことにする。

[新漢語・新洋語]

さきにものべたように、円遊の噺には改作・新作がおおく、当時の東京を舞台とした話が展開される。地の部分もふくめ、特に円遊の口演には明治になってからつかわれはじめた漢語や洋語がみられる。

38. 尤も百花園を読むお婦人には然んなのは無 [ない] がどうかすると我々社会にはありません (素人洋食、円遊、今村)

39. 御新造 [ごしんぞ] が私の御新造奥さんワイフと決定 [きまれ] ば (王子の幫間、幫間、酒井)

これらについては、いずれ整理した結果を報告するが、いくつか目についたものを、以下にかかげておく。

[新漢語] 運動 開業式 議員 軍艦 自転車 人民同権 船長 探偵 電話機局 文明国

[新洋語] オムレツ ステーション ステッキ テーブル フランケット ライスカレー

5 まとめ

調査結果のあらましの報告をのべたところで、演芸速記雑誌の口語資料としての評価と今後の予定をしるしておく。

これまでにものべたように、20世紀にはいつてからのレコード資料とくらべれば、速記の口語資料としての価値はひくいものといわなければならない。とりわけ、音韻に関してはきわめてひくいとみなければならない。文法に関しても、語形のゆれにかかわるものについては、慎重なあつかいが必要だろう。しかし、指定表現や待遇表現などについては、本稿ではほとんどふれなかったが、多様な登場人物の出現とあいまって、十分に研究の対象となる可能性がある。さらに、語彙に関しては、これまで話しことばに関する調査がすくなかったこともあり、実際の使用語彙の面からの実態の把握が期待される。すなわち、19世紀末の東京語資料として、速記雑誌を活用することに、一定の評価はあたえてよいとおもわれる。

そのために、今後の調査項目として、以下のことを予定している。

- ・円遊以外の落語家による口演の調査
- ・速記者による表記法のゆれの調査
- ・『百花園』速記と円朝をふくむ単行本速記との比較
- ・速記資料とレコード資料の比較
- ・明治生まれの東京落語の演者による録音資料との比較

本稿は、その手はじめの小報告である。

[注] 校了まぎわに、ヒ476例中シとなっているもの2例(下掲)があることに気づいた。論旨に変更はない。車「道具屋さんアノ半股引 [はんも、しき] が御座いますか 与「半股引 [はんも、しき] ですか(道具屋、増田)

【文献】

- 秋永一枝 1995 東京弁は生きていた、ひつじ書房。
 秋山節義 1962 速記の変遷、『落語名作全集〈第二期〉』2。
 朝倉治彦 1961 雑誌「百花園」について、『落語名作全集〈第二期〉』1。
 井藤幹雄 1986 戯曲・落語速記にみる明治期の丁寧表現、『国学院大学大学院文学研究科論集』13。

- 榎本滋民 1962 明治の速記本, 『日本文学』 11-6.
- 金沢裕之 1998 近代大阪語変遷の研究, 和泉書院.
- 旭堂小南陵 1994・2000 明治期大阪の演芸速記本基礎研究(正・続), たる出版.
- 国立国語研究所 1995 報告112 テレビ放送の語彙調査 I—方法・標本一覧・分析—, 大日本図書.
- 佐伯哲夫 1981 牡丹燈籠に見る二三の語形の揺れから, 『国語語彙史の研究』 2.
- 佐藤 亨 1992 近代語の成立(第9章—第11章), 桜楓社.
- 清水康行 1982 今世紀初頭東京語資料としての落語最初のレコード, 『言語生活』 372.
- 1983 言語資料として見た速記本『恠談牡丹燈籠』における二重性, 『創立二十周年記念鶴見大学文学部論集』.
- 1984 東京落語資料の問題点若干, 『国文学 解釈と鑑賞』 49-1.
- 1986a 二十世紀初頭の東京語子音の音価・音訛—落語レコードを資料として—, 『築島裕博士還暦記念国語学論集』.
- 1986b 二十世紀初頭の東京語母音の音価・音訛—落語レコードを資料として—, 『松村明博士古稀記念国語学論集』.
- 1988 『牡丹燈籠』の漢字, 『漢字講座 9 近代文学と漢字』.
- 1998 速記は「言語を直写」し得たか—若林珺蔵『速記法要訣』に見る速記符号の表語性—, 『文学』 9-1.
- 進藤咲子 1982 三遊亭円朝の語彙, 『講座日本語の語彙 6 近代の語彙』.
- 杉本つとむ 1988 東京語の歴史, 中央公論社.
- 田島 優 1998 近代漢字表記語の研究, 和泉書院.
- 田中章夫 1983 東京語—その成立と展開—, 明治書院.
- 1985 「言いシマウ」から「言っちゃウ」へ—江戸語東京語の完了形—, 『近代語研究』 第7集.
- 寺田智美 1999 明治期落語速記にみえる指定表現の体系について, 『早稲田日本語研究』 7.
- 暉峻康隆 1980 落語速記発掘の意義, 『口演速記 明治大正落語速記集成』 1.
- 永井啓夫 1998 新版 三遊亭円朝(初版1962), 青蛙房.
- 中村通夫 1948 東京語の性格, 川田書房.
- 野村雅昭 1968 落語のことば, 『言語生活』 207.
- 1977 落語・講談, 『国語学研究事典』.
- 1980 落語と江戸語・東京語, 『口演速記 明治大正落語速記集成』 月報3.
- 2001 明治期落語速記の語彙構造, 『早稲田日本語研究』 9.
- 飛田良文 1992 東京語成立史の研究, 東京堂出版.
- 福岡 隆 1978 日本速記事始, 岩波書店.
- 1980 落語と速記, 『口演速記 明治大正落語速記集成』 月報1.
- 松村 明 1998 増補 江戸東京語の研究(元版1957), 東京堂出版.
- 都家歌六 1987 落語レコード八十年史(上・下), 国書刊行会.
- 森川知史 1991 『口演速記 明治大正落語速記集成』にみえる敬語, 『九州龍谷短大紀要』 37.
- 山本正秀 1962 三遊亭円朝の人情話速記本とその影響, 『言語生活』 132.
- 1965 近代文体発生の史的研究, 岩波書店.

【付記】

本稿は、1998年度早稲田大学特定課題研究「東京語資料としての明治期落語速記の研究」(課題番号98A-688)の報告の一部をなすものである。データの整理については、文学研究科日本語日本文化専攻の川上真紀子・長谷川隆両君の協力をえた。